

talk! talk! talk! 写真家・中村征夫さん



写真家 中村征夫さん

地上に生きる人間にとって未知の世界とも言える海の中。写真家・中村征夫さんは計り知れない海の魅力にとりつかれ、美しく、そして厳しい海の世界を写真で私たちに伝え続けている。今回は写真や海との出会いから撮影秘話、そして海の魅力についてたっぷりとお聞きした。

プロフィール

なかむら-いくお。1945年、秋田県生まれ。20歳のときに独学で潜水と水中写真を始め、専門誌のカメラマンを経てフリーランスとなる。現在、撮影プロダクション、スクール代表。日本写真家協会、日本写真協会、日本自然科学写真協会会員。国内外の海や自然、人々、環境を含め積極的に取材。数多くの話題作を発表する。ライフワークの東京湾をはじめ、水俣湾、空港建設で揺れた石垣島・白保、沈没による重油流出が問題となったナホトカ号の漂流地三国町、奥尻、諫早湾など、社会性のあるテーマにも果敢に取り組み、水中の報道写真家としても定評がある。またスチールのみならず、TVコマーシャル、映画やハイビジョン映像の撮影も行っており、その撮影技術は高く評価されている。講演および出版物、テレビ、ラジオなど様々なメディアをとおり、海の魅力と環境問題を伝え続けている。最近の写真集に、『沖繩珊瑚海道』（アスペクト）『海の夜間飛行』（TBSブリタニカ）『水中の賢者たち』（集英社）、エッセイに『仲良しサカナ組』（さかなクンと共著・三五館）などがある。7/25～8/6の13日間、仙台藤崎デパート（仙台市一番町）本館7階にて写真展「水中の賢者たち」「海の季節」を開催。また、7/29～8/31にはJCIIフォトサロン（千代田区・日本カメラ博物館内）にて25年間撮りためた日本の南の島々に暮らす人々、風景、海中写真などをモノクロームにて展示する写真展「熱帯夜」を開催予定。

写真もダイビングも知らずに..... サラリーマンから水中写真家に

海と写真、興味を持たれたのはどちらが先だったのですか？

珍しいかもしれないけれど、ダイビングと写真を始めたのは同時なんです。20歳のときに真鶴で海の写真撮っているグループに出会ったんです。「海の中で写真が撮れるのか」という衝撃を受けて、自分もやってみようと思ったんです。「これやろう！」と決めてしまったんです。

それまで海や写真とはまったく縁がなかったのですか？

そうですね。僕の生まれは秋田で、海は遠かったんです。八郎潟（※注1）がそばにありましたから小学生の低学年ぐらいまでかな、1メートルぐらいの浅瀬に潜って水浴び程度に遊んでいましたけど、それぐらいですね。写真は.....僕、実はカメラが嫌いだったんです。全然興味がなかったんです。一度だけ高校生のときにハーフサイズのカメラ（※注2）を買ったことがあったんです。でも72枚撮れてしまうから撮っても撮ってもなくなるし、現像に出したらプリント代は高いし（笑）。「俺にはカメラは向かないな」って思ってた好きな女の子にカメラをあげちゃいました。それ以来まったく触ってなかったんですけどね。人生のいたずらとはこのことなのでしょうね。



オキナワトラゴロウ（沖縄）



ほんのちょっとした出会いがきっかけで、海の中でカメラを構えることになったというのはおもしろいですね。

初めて真鶴の海を見たときに、いろいろな生き物がいることにびっくりしたんです。海に人が潜って写真を撮れるんだという驚きとともに、海って凄いなあというダブルの衝撃があって、それで決心してしまいました。僕、結構めっちゃくちゃなんです。何ごとも自分の勘のままに、こうと決めたらすぐ行動に移してしまうんです。水中カメラマンになると決めたときも、それまでやっていたサラリーマンを身内に何の相談もなしに“ばーん”と辞めてしまいました。

では、ご家族はびっくりされたのではないですか？

僕はこれで食べていきたいと思っていたんですけど、親兄弟からは海に潜って写真を撮るなんて遊びとしか思えなかったでしょうね。「趣味と実益が一緒になるわけがない！」って、まさに勘当モノでした。親兄弟は僕が会社をクビになったんだと思ってましたね（笑）。自主的に辞めたんだと言っても「なんかやらかしたんじゃないの？」って言ってたんじゃないですか。

※ 注1 八郎潟＝秋田県のほぼ中部に位置する湖。日本海とつながっていたため淡水と海の両方の魚が採れ、周りには多くの漁民が暮らしていた。しかし、戦時中の食糧難解消の目的で米を作るため干拓が計画された。昭和32年に干拓が始まり現在八郎潟は大潟村に姿を変えている。

※ 注2 ハーフサイズカメラ＝画面サイズフォーマットを通常の24x36mmではなく17x24mm前後にすることで、より多い枚数の写真を撮影できるカメラ。画質や規格の違いから今ではあまり使用されなくなったが、愛好家には根強い人気がある。

露出不足で失敗の連続 「撮っても撮ってもフィルムは真っ白でした」

写真もダイビングも、ゼロからのスタートだったのですよね。相当苦労されたのではないですか？

ええ、最初は全然ですよ。写真の「し」の字も知らないんだから。撮っても撮っても真っ白なネガフィルムが写真屋から返ってくるんです。「露出が足りないんですよ」と言われるんですが、「足りないなら普通は黒くなるんじゃないの？」って言っていましたから（笑）。露出が合っていると黒くなるんだといくら説明を受けてもわからないんです。あまりのひどさに見兼ねて写真屋のお兄ちゃんが海まで着いて来てくれたこともありましたが、でも彼は潜れないから、海岸で1人でパチパチ撮っていて結局何も教えてくれなかったんですけど（笑）。

海の中ではとくに露出が足りなくなってしまうのでしょうか。

そうですね。そもそも光がなければ写らない、ということが分かっていませんでした。最初は素潜りでしたし、スピードライトを買うお金もありませんでしたから自然光で撮っていました。素潜りも下手だから水面に浮いて、カメラを下に向けて撮影しているんです。おまけに絞りもシャッタースピードもよくわからず、何の設定もしていませんでしたから、どうしたって写らない。何枚フィルムを浪費したかわからないですよ。

他に撮影で難しかった点というのはどこですか？

素潜りだから体が揺れてブレてしまうんです。おまけに僕はカメラを下に向けて撮っていたから余計に光が足りなくなる。光の不足を補うために感度400のフィルムを使って絞りを解放にしたとしても、シャッタースピードは1/15か1/30と、かなり遅くなってしまいます。これは陸上での撮影でも手ブレをしてしまうシャッタースピードですから、これが不安定な水中だとかなり難しいです。

今でもその難しさは同じですよ。いかに自分の体を揺らさないか、動かさないかっていうことが重要なんです。

コツをつかみ始めたのはどのくらいたってからですか？

少し写るまでに2年ぐらいいかりましたね。ダイビングもその頃から素潜りではなくボンベを付けて潜るようになりました。



ヤギとキンメモドキ (沖縄)

どんな生き物に出会うかわからない その一瞬を撮らえられるかが勝負



現在カメラはニコンを中心に使ってくださいているそうですね。

初めて手にしたのはニコンS1型なんです。今持っている人は少ないでしょうね。僕も10年ぐらいいっていたんですが、小笠原の撮影で観光船に乗り込むときに海に落ちてしまってそれっきり.....今は泥の中に埋もれているんでしょうね。

実はそのあと他のメーカーのカメラを使っていたんですが、ニコンSの広告をシリーズで撮影する機会がありまして、それをきっかけにまたニコンに変わったんです。

数種類のカメラをお持ちだと思いますが、どのように使い分けていらっしゃるんですか？

撮る目的によって全部違いますよ。たとえばニコンRSだったら巨大生物や雄大な風景。F3、F4だったら小指の先ぐらいのおもしろい生き物だったり。まあ、本当にその時々、まちまちですね。

1本の潜水時間でどんな生き物に遭遇するかわからない世界なんです。その一瞬を撮り逃さないために、2~3台は持っていかないとはいけませんよね。それにスピードライトを各カメラに1、2台とタンクを背負って潜ります。

大変な大荷物ですね。

そうですね。でも、常にどんな生き物にも対処できる状態を待っていないとダメなんです。一番腹が立つのはカメラがオフになっているときです。「来た！」って思ってアシスタントからカメラをもらおうとシャッターが下りないんですよ。次の瞬間にはもうその生き物がいなくなってしまうこともありますからね。シャッターチャンスはもう二度と来ないですから、それを撮れなかったというのは一番くやしいですよ。

あらゆる生物の祖先である海の生き物 その生きざまから学ぶことは多い

海が一番の魅力とはどこですか？

謎が多いところでしょうね。人間の解釈や知恵、科学を持ってしても最後まで解明できないことが多々あるでしょう？ 結局、海というのは陸と別世界、海の生き物は別世界の住人なんです。だって台風が来ても地震が来ても、そこでどんなに大変な被害があったとしてもへっちゃらなんです。翌日にはひっくり返った岩の下で平気で遊んでますからね。人間だったらそこから復興するのにかなりの時間が必要ですから、海の生き物たちはかなりしたたかだと思えますね。

僕はそんな生き物たちと向き合っているわけだから、相手に不足はないかなという感じですね。

やはり簡単には撮影させてくれないのですか？

人間を撮るよりも難しいですよ。言うこと聞いてくれないし、野生の生き物ですから絶対に慣れてくれない。

海の生き物たちは人間を理解しているのでしょうか？

理解しているでしょうね。人間をバカにしていますから(笑)。

たとえば2~3cmの魚が家族を守るために僕らに噛みついてくるんですよ。人間でいうと象 オオイソバナとネンプツダイ (沖縄) に向かっていくようなものですから、相当な勇気を持っていると思うでしょう？ 人間から見ればそれは死を覚悟した行為に見えるんだけど、実は魚にとってはそうじゃないんです。人間が恐くないんです。「おまえなんかあっちいけ！」って感じなんですよ。人間なんか捕まわれないって、それぐらいの自信を持って向かってくるんです。人間を全然相手にしていませんよ。

では、からかわれて悔しい思いをしたり、ということもあるのですか？

それは多々あるけれど、逆に生き物たちの生態、生きざまから学ぶことが多いですね。

海の生き物たちは僕たちの祖先ですからね、人間よりもはるかに進んでいるんですよ。それに、生まれた瞬間に食べられてしまうかもしれない、という過酷な世界を生きているんです。かわいそうとか、変な同情心を持つことが返って命取りになる。人間の観点なんて無意味なんです。そう考えると、僕は変な世界を撮っているんだなと思いますね。

人間をバカにするのも納得、という感じですね。

そう、人間をなめているところがいいですよ。



『好きな海で仕事をしているのだから』 汚染される海の現状を伝えなければいけない

今、世界中で環境破壊が進んでいますね。

ええ、かなり深刻だと思います。今、まともな海はほとんどなくなってしまったのではないのでしょうか。

たとえば、温暖化で徐々に珊瑚が減ってしまっているとも聞きましたが。

徐々に、なんてものではないですよ。世界中でどんどん減っています。2~30年後には半分以上の珊瑚がなくなるのだらうと言われています。

珊瑚は森林以上に二酸化炭素を吸収して膨大な酸素を放出しているんです。その珊瑚がなくなってしまえば、地球がオーバーヒートしてしまって機能しなくなるでしょうね。南極の氷もどんどん溶けるし干ばつも起こる。たとえ森林があっても、珊瑚がなくなってしまうと地球は150年ほどしか生きられないと言われていたんですよ。

まだ国ものんきに構えているふしがありますが、本当に一刻の余念もない状態ですよ。マスコミもまるでファッションのように環境問題を扱っていますが、安易ですよ。もっと深く時間をかけて取材をして、真剣に取り上げていかねば意味がないと思います。

中村さんは東京湾をはじめ、沖縄の白保、諫早湾など環境問題に直面している海も撮影されていますよね。



そうですね。潜っていると、人間による環境汚染によって生き物たちが病んできているのを目の当たりにするんです。こんな海底まで破壊が進んでいるということは、それだけ陸地の乱開発が進んでいるということなんだと思うんです。その状況を見ているから、僕もただ美しい海を撮っていくというよりも、やはりそういった社会的なテーマを取り上げて、みなさんに海の現状を伝えていかなければいけないと思っています。

今後も、そういった問題に取り組まれていくのですか？

はい。海がどれだけ病んでいるのかを、何回か言っても分かってもらえませんか。せっかく好きな海で仕事をさせてもらっているんですから、写真などを通してそれを伝えることも使命なのではと思います

美しい世界に繰り広げられる ドラマを撮っていきたい

海を撮るときに、気をつけていることはありますか？

“ただ撮っただけ”にはしたくありませんね。海の中というのは、潜水の技術的なことさえきちんとおさえてしまえば、写真を撮るのは楽な世界だなと思うんです。なぜかと言うと、海は姿形、色彩、すべてにおいて完璧な造形物なんです。だからその造形物を撮っただけで立派な作品になってしまうかなと。

確かに中村さんの写真を拝見して、海の生物がこんなにも鮮やかで多種多様なものなのかと驚きました。

こんなに派手で本人はよく恥ずかしくないな、と思うほどです。どんなデザイナーががんばっても出せないようなグラデーションだったり、「どうしてこんなふうになるの？」っていう形をした生き物がある。真っ赤な珊瑚の上に黄色いシダがボンと、一輪の花のようにつかまっている風景がそこにあるんです。よくこんなところに、こんなものがあつたな、と思うことは多いです。海の中にいると、やっぱりこういうものは神が作ったのかなあって感じますね。僕はただそれを見て撮っているだけなんです。ですが、やはりそこからもうひとつ進んで撮りたいんです。

もうひとつというのは？

人間の感性を刺激するようなものを撮ってみたいです。食うか食われるかの世界だったり、生き物の意表をつかれるような行動だったり、きれいな中にもドラマ性が欲しいですね。それがないとただ、「ああ、きれいね」で終わってしまうんです。それに、初めは「きれいね」でいいかもしれませんが、ただ鮮やかで美しいだけでは飽きられてしまうんです。やはり写真家としては、飽きられないものを撮っていかなくてはならないと思います。

では最後に、これから撮ってみたい海はありますか？

これから.....特にないですね。うん、僕はどこでもいいんです。どんな海にも生き物はいますから。

では、追い続けていきたい生き物は？

あー、それもいっぱいいますね。

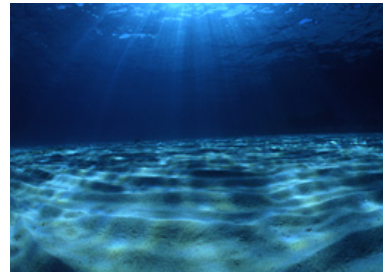
それに今は海だけでなく人もよく撮っているんですよ。おじちゃんとかおばちゃんとか、街角のカップルとかね。僕が水中を始めた頃は写真家の多くは陸上で撮影していたけれど、そういう人たちが今は水中写真を撮り始めている。僕は進化の過程みたい在海からだんだんと陸に上がってきているんです(笑)。



では、これからもいろいろな所に行っているいろいろな人や生き物に出会って、たくさんの写真を撮ってみたいという感じでしょうか。

そうそう、そのとおりですね！

今後もなかなか見ることのできない海の世界を、写真を通して私たちに見せてください。本日はお忙しいところ、ありがとうございました。



砂紋のある風景（フィリピン南シナ海）

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.